PROJECT

中産階級出身の在日ブラジル人の生活世界

文
奈倉京子

共同研究【若手】● 帰還移民の比較民族誌的研究──帰還・故郷をめぐる概念と生活世界（2011-2013）

2011 年 10 月からスタートした本共同研究は、移住先で生まれ育ち、いまだ見ぬ「母国」へ「帰国」することになった第 2 世代以降の移民を対象とし、民族誌的視点から生活世界を描き出すことにより、「帰還」や「故郷」の意味を問い直すことを目的の 1 つとしている。本稿では在日ブラジル人の生活世界を「自己実現」という視座から捉えた渡会環（愛知県立大学）とアンジェロ・イシ（武蔵大学）の報告（第 4 回研究会、2013 年 4 月 28 日開催）を紹介したい。

メーキャップコース受講を通して自己実現を目指す女性たち（渡会環報告）

従来の在日ブラジル人研究では、短期的・中期的期間での労働を目的とした「デカセギ」として日本に滞在しているという言説が、彼らの就労や就労に直接結びつく活動以外に研究者の関心を惹きつけてこなかった。これらの動向を踏まえ、渡会は、在日ブラジル人の第三世代の 20 代から 30 代の女性の中で、メーキャップコースを受講することを通して自己実現を目指す女性を考察の対象とし、彼女たちがどのような生活世界を創造しようとしているのか、また「デカセギ」イメージに対抗した自己イメージを創り出そうとしているのか否か、という問題意識を持ちながら、静岡県掛川市、岐阜県美濃加茂市、群馬県大泉市で行った調査を基に報告した。

まず、彼女たちが資格取得コースにお金を使うようになった背景を見てみよう。リーマンショック以降、在日ブラジル人の労働に対する考え方に変化が見られた。彼女たちはその変化を、「リーマンショック以前は仕事だけを考えていた」が、その後は個人の「成功」、「自己実現」、「投資」を考えるようになったと語る。つまり、お金を稼ぐのみを目的とした労働から、そのお金を使って生活の質を上げていくことに関心を持つようになったことや、目先の生活だけでなく、長期的な生活設計を立てていくことへの意識が強くなったことを表している。ただ実際はこうした語りはデカセギ現象が始まった頃から見られ、リーマンショック後に一層強化されたものである。成功や自己実現といった語りはそもそも、ブラジルの中産階級の価値観を日本へ持ち込んでいることの顕在化である。

こうしたブラジルの中産階級の価値観が日本での個人への「投資」に影響を及ぼしているのである。資格取得コースに参加することの他にも、休日を利用してタイへマッサージの研修へ行くなどの「投資」と消費が混ざり合った過ごし方も見られるようになった。

メーキャップコースを受講する第三世代の在日ブラジル人女性（2013 年 8 月、渡会環撮影）。

メーキャップコースの資格取得証明書が果たしてブラジルで就職する際にどの程度認められるのか、彼女たちの自己実現にどれくらい寄与するのか、彼女たちが今後どこへ向かおうとしているのかは定かではない。だが、ここで彼女たちにとって、証明書が実際に役に立つかどうかということは大きな問題ではない。証明書（紙）そのものに価値があり、証明書をもらうこと自体が目的化しているのである。つまり、日本に来てからの生活が無意味でなかったことを、証明書を前に確認し、安心感を得ているのである。この明確に合理的とは言えない戦略によって、日本とブラジルの双方で生きることに安心感を得ているのではないだろうか。そうした彼女たちに対し、帰還や故郷の意味を問うために、何年後にブラジルへ帰るのか、どこへ向かおうとしているのか、といった質問を調査者がすることは、彼女たちを動揺させてしまう可能性があるので、それを恐れた渡会は質問をためらったと報告した。

最後に、今後は資格取得と自尊心の関連性の把握や、美容行為を通じた自己イメージの創出に関する考察を深めていきたいという課題が提示された。

渡会報告で興味深いのは、日本へ出稼ぎに来る前の、彼女たちのブラジルにおける階級（中産階級）とその価値観や生活様式に注目し、それが日本の生活環境の中でどのように受止められているかという点に注目している点である。ブラジルでの社会的地位と日本でのそれとのギャップをどのように埋めるのか、その方法の1つがメーキャップコースの受講という形で現れたのであろう。以下で紹介するアンジェロ・イシ報告も、階級に注目している点が、渡会報告と共通する。

トランスナショナルなイベントから考える「在日ブラジル人」と「在外ブラジル人」の生活世界（アンジェロ・イシ報告）

イシは、大きく2つの内容について報告した。1つは、これまで注目してきたブラジルの「ミドルクラス出身」の人々が「失われたミドルクラス的アイデンティティ」を取り戻すプロセスを振り返り、「自己実現」のキーワードから「在日ブラジル人」の生活世界を捉え直した。もう1つは、「在日ブラジル人」を1980年代以降ブラジルから世界に離散したブラジル移民の一部として位置付け、「在外ブラジル人ディアスポラ」の観点から在外ブラジル人の様々な「イベント」に注目することにより、帰還、故郷、生活世界の概念を広い視野で議論した。

まず、1つ目の内容について、1980年代から90年代前半は、自己実現そのものを「ブラジルに帰ってからリカバーするもの」として「先送り」にしていたが、90年代後半になると消費（日本で稼いだ貯金を切り崩す）とレジャー（平日と週末の使い分け）による自己実現が行われ、2000年代は「脱工場労働」による自己実現の模索が顕著になってきた。ここでの「週末」の意味が重要である。在日ブラジル人（ブラジル社会における中産階級）にとって日本での生活はマイナスからのスタートであった。それを補完してゼロに戻すことは失われたものの回復を意味した。つまり、彼らにとっての週末を楽しむ余裕ができたということは、マイナスをゼロへ戻し、そこから生活をプラスにしていったという意味で特別な意味を持つのである。

次に、2つ目の内容について、「政治イベント」（ブラジル政府による「世界ブラジル人」会議の開催）、「ビジネスイベント」（日米の企業家によるエキスポ・ビジネスの開催）、「メディア・イベント」（グローボ国際放送による「ブラジリアン・デー」の企画・実施）、「文化イベント」（在米ブラジル人による「フォーカス・ブラジル」）の事例が紹介された。これらの事業には、ブラジル政府、ブラジルのテレビ局、日米の企業家、在米ブラジル人プロモーターなどが関わり合っているが、誰が誰を先導したかについては明らかでなく、同時並列的に起こっていると言える。

このようなイベントを通して「在外ブラジル人」としての「ディアスポラ意識」が強化されていくことは、在日ブラジル人の故郷認識にいかなる影響を及ぼし得るのだろうか。まず、ブラジルか日本かのどちらか、あるいはブラジルと日本の間か双方に故郷があるといった二項対立的な認識に留まらなくなるであろう。在日ブラジル人は、他の地域に広がる在外ブラジル人にも目を向け始めていることから、彼らの生活世界や故郷認識もブラジルと日本に留まらない、より広い範疇に求められるようになる可能性がある。しかしその一方で、階級や職業の違いによってもそれらは異なる様相を見せるかもしれない。更に、「在外ブラジル人」という範疇化は、連帯化をもたらすと同時に、差異化・階層化にもつながるかもしれない。例えば、日本と他国とのブラジル人移民の受入れ方を比較した場合、日本では合法的に滞在できることから、他の国で様々な問題をもつブラジル人移民よりも恵まれた存在として差異化されていく。

渡会報告とイシ報告の共通点は、移住元のブラジル社会で中産階級である集団に注目したことである。その中でも渡会は、個人・ローカルレベルから、在日ブラジル人の第三世代の20代から30代の女性がメーキャップという自己表現のツールを手に入れることを通して自己実現を目指す中での個人の感情について考察した。そしてイシは、集団・トランスナショナルレベルから「イベント」を通じたネットワーク作りとそれが個人のアイデンティティのもたらす影響について検討した。実際には両者の状況が重なり合っており、ミクロな語りの中にマクロな語りが現れたり、トランスナショナルレベルの活動がローカルな集団・個人の生活世界や故郷認識、アイデンティティに影響を及ぼしたりすることが見られた。

このように、帰還移民が何らかの自己表現・自己実現のツールを手に入れることにより、自らの生活世界を創造していくことは、新たな居場所・「故郷」を見出すことにつながるものであることが予想される。

なぐら きょうこ

静岡県立大学国際関係学部講師。文化人類学専攻。人の移動から現代中国社会・文化の動態性を考察している。著書に、『「故郷」与「他郷」――広東帰僑的多元社区、文化適応』（北京社会科学院文献出版社 2010年）、『中国系移民の故郷認識：帰還体験をフィールドワーク』（風響社ブックレット 2011年）、『帰国華僑――華南移民の帰還体験と文化的適応』（風響社 2012年）がある。